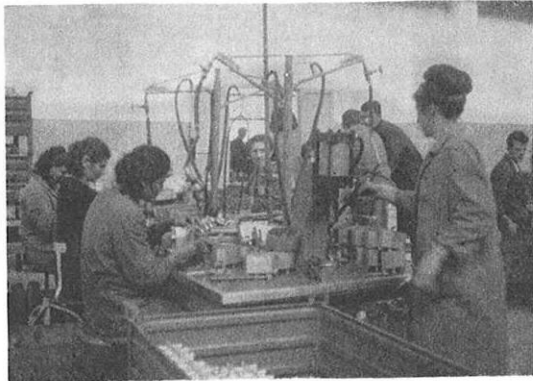


一口に東南アジアの国々が遅れているといっても、一体どこがどう遅れているのだろうか？と思いつながら訪問してみると、全くすべての面で十五二十年前の日本の状態と同じである。つまり、経済力に乏しいということになるが、天然資源は実に豊かで、それを如何に利用するかを知らないこと、教育が徹底的に行なわれていないことにあると思つた。では何故下層階級までへの教育が浸透してないのか？それは、東南アンの持つ豊かな資源に目を付けた西歐諸国による植民地政策のために、一般住民には教育の機会が与えられなかったこと、そして年中暑く、体を気だるくし、思考力のなぶりをきたす氣候のために、物事を深く真剣に考えようとすることが出来ないところに、東南アンの後進性というものを知らることが出来ると思う。

一番強くなるとの労働意欲の無さを感じたのはコロンボ（セイロン）、マドラス（インド）で、腕組みして街角にたむろする男性達やこじぎが多く、子ども達は金や物をねだつてまわつてくる。彫りの深いかわいい顔立ちの子ども達なのに、「かわいい！かわいい！」と頭をなでる気にもなれずバスの急ぎ逃げ帰る。この子らに「ギブミーマナー！」などと言わせないようにするには、まず、大人達が労働意欲を燃やし、また下部までの徹底した教育を行なうことが差し迫る。

第九回日本青年海外派遣団南欧班の一員として香港、コロンボなどの東南アジア各都市とフランス、スイス、イタリア、ユーゴスラビア、ギリシアの南欧諸国を見学することができた。

初めて見る外国のことで、訪ねる先々全てに興味深かったが、特にユーゴスラビアが印象に残っている。ユーゴスラビアは、私達が訪問した国々の中で唯一の社会主義国家だった。かなり自由に見学することができた。ユーゴスラビアは一つの大統領と連邦、二つの文字、三つの宗教、四つの言葉、五つの民族、六つの共和国、七つの国と国境



<ユーゴスラビアの精密機械工場>

る。それと国民全体の福祉のためにいいかえると、より多くの国民がより幸福になることを第一の目的とし、「目的達成の手段として社会主義を採用しているにすぎない」との観点から、社会主義よりも資本主義を用いた方がよい場合は、それを採用する柔軟さなどが相まってソ連から離れ、共産主義陣営の中で、独自の社会主義国家建設へと進んでいる原動力となっている。その一つの現われが「労働

つて必要なことであろう。東南ア諸国の中では、日本に続くといわれる台湾も農業は殆んど人力と畜力であり、その主都である台北市内を牛車や輪タクがのんびりと通る。のどかと言えのどかであるが、東京と比べてどうも同じ東洋であるとは信じがたい感じである。

ヴェトナム戦で、国の北部と東部に米軍基地を置いていたタイの主都バンコックは、大邸宅や鮮やかな色彩の花々や建物で、美しくきらびやかな街である。しかし、大部分は外国人の利用する所であ

東南アジアをめぐる

熊谷初枝

(昭和四十二年「青年の船」熊本県代表)

り、タイ人達は「バンコックはタイではない。」と言っているように、実に貧しい生活である。農業は幼稚だし、バンコック市内に住むタイ人達は、母なる河メナムの河岸で、メナムの水を飲料水として暮らしている。水はおどろ色をしてい

り、タイ人達は「バンコックはタイではない。」と言っているように、実に貧しい生活である。農業は幼稚だし、バンコック市内に住むタイ人達は、母なる河メナムの河岸で、メナムの水を飲料水として暮らしている。水はおどろ色をしてい

を接すると表現されるように非常に複雑な国である。歴史的にもトルコ、オーストリアによって長い間支配されていた時代があった。バルチザンの戦いを起し、複雑な国内事情も克服して今日の独立をもちたしているのは、長い間の圧政に反発する民族主義が底流となっている。内部的には五つの民族が時に反目することもあるが、一度対外的になれば強く結束する民族意識が国民全般に浸透してい

者自主管理方式」である。生産の企画から利益の分配までを労働者自身の自主的な管理に委ねるものである。生産の企画、利益の分配等を立案する「労働者委員会」、それに基づいて実行する「経営者委員会」、公募された「企業長」によって会社は運営される。労働者は「生産部門単位」の代表とし両委員に選出されることが出来る。従って労働者は直接、間接に生産から利益の分配までに参画でき

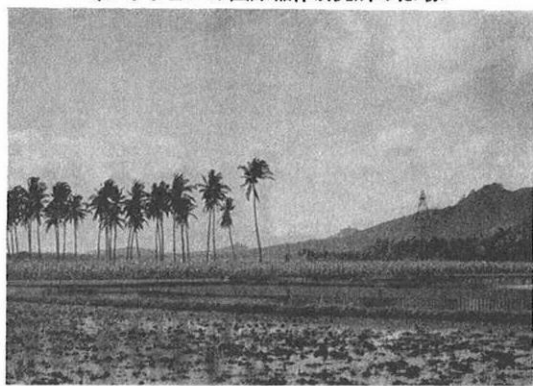
希望に満つ南欧諸国

本田正和

(昭和四十二年度 海外派遣熊本県代表)

給料まで労働者間の話し合いによって決る訳だ。再生産分の先食、経営技術の低さなどの問題はあがるが、彼らが誰からも搾取されることなく、希望に満ちて働いている姿は印象的だった。会社の経営は国家から何ら規則を受けず原料の仕入れ先、製品の販売先等も自由で広告活動も派手に行なわれている。ベオグラード、サラエボの街頭に立つて、街並み、ファッション、人々の動き

<フィリピンの国際稲作研究所のほ場>



が、一歩郊外へ踏み出せばカンボンと呼ばれるヤシの葉でふいた原住民の住居が並び、国の政策とそこに住む人々の経済力の伴わないアンバランスを感じ、これが新興国というものだろうと一國を繁栄させることの大変さをつくづくと思う。東南アンのどの国も日本を手本とし、頼りにしている。我々は少しでも彼等の手助けとなるべきことを心せねばと肝に銘じたことである。

「青年の船」とは「青年の船」は、日本の青年を「青年の船」に乗船させ、各種研修、規律ある団体生活を通して青年の心身を鍛錬し、また巡航先において各国青年との交歓、日本文化の紹介、各地の視察見学を行なわせることにより、国際的視野を広め、国際協力の精神をかん養し、青年に日本の姿を正しく理解させ、もって次代をなす中堅青年の育成を図ることを目的としている。

青年海外派遣とは皇太子殿下ご成婚を記念してはじめられたもので、ことしは第九回目。日本の青年に広く海外の実情を視察研究の機会をあたえ、その国際的視野を広め、日本の姿を正しく理解させるとともに訪問国における社会開発活動の現地視察を通じて、国際協力、国際奉仕の精神を養い国際親善に資することを目的としている。

なに一つとって見ても他の南欧諸国と異なる社会主義的なものはない。長髪とミニのカップルが腕を組み歩いているのを多く見かけた。

ユーゴスラビアは「労働者自主管理」によって「より多くの国民がより幸福になるよう」に真剣に努力を重ねている。私はこれからの発展に注目したいと思う。今回の旅行を通じて日本のよき、大和民族の優秀さを多くの点で感じた。勤勉さ、義務教育程度の高さ、工業力など挙げれば限りがない。その反面改めるべき点も少なくない。「交際費の総額五、六千億円」と聞くが、これに類する無駄使いは私達の身近な所にはない。日本中が上手に消費することに心を掛けたならば、道路も、住宅も社会保障も今よりもっと急ピッチで拡充整備されるだろう。社会的資産が充実してはじめて「生活を楽しむ」南欧並の生活を営むことができると思う。